

劉成有氏のコメントに対する回答

河 由 真

(韓国 金剛大学校)

私の論文を丁寧に読み、すばらしい論評をしていただいた劉成有教授に感謝申し上げます。劉教授が論評文の末尾で質問された幾つかの問題に対して簡単に答弁いたします。

1. なぜ南朝の涅槃師たちは“中道仏性”、“三因仏性”、“万善”の問題を特に重視したのか。

中道としての仏性を理解するのは、仏性思想が大乗仏教の般若中観学の教理に基づいていることを証明するために必ず必要な過程であったと考えます。『涅槃経』では因果の概念を通して仏性を解釈していますが、涅槃師たちが二因仏性や三因仏性として仏性を解釈したことから、涅槃師たちが成仏の原因に対する議論をとっても重視したことがわかります。万善の問題は成仏の方法、すなわち修行論に対する重視を表します。涅槃師たちが成仏の原因、および原因から結果に至る過程に注目したことがわかります。

2. “中国的要素”を持った“神明”思想以外に、“仏性”、“万善”はどのように“中国的要素”を具現したのか。

中国人の仏性理解に関して、すぐに想起されるのは、孟子の性善説と四端説とです。孟子が人間には善なる本性があると述べたことは仏性に例えられます。四端説は、人間の様々な善なる行為の端緒が人間の心にあるというもので、万善思想は一毫之善が集まって成仏するようになる所以说くもので、四端説ともその意味が相通じるものと言えます。

3. これら“中国的要素”は、徳性良知、修身齊家治國平天下の思想の中から、ある種の解釈を得ることができるのではないか。

徳性良知は宋明理学の修養論を代表する概念の中の一つです。ここで良

知とは、人間の心の中に占めている修養の根本となる部分を指し、仏教的に表現すれば、仏性にあたるといえると思います。

修身齊家治国平天下の思想は、簡単に言えば、内聖外王と表現できます。内聖外王は、個人の修養論と国家の統治論とを結合させたもので、中国の代表的な伝統思想と言えます。このような傾向は、確実に仏教の中国化の過程に具現しており、魏晉南北朝時代から、すでにその結合の様相が現れていると言えます。『大般涅槃經集解』では、ただ修養論だけを扱い、統治論に言及してはいませんが、このような修養論を基盤として統治論を展開したのが、昨日、張雪松教授が発表された論文で扱った“国主即是当今如来”思想であると言えます。

4. これら“中国的要素”は、魏晉南北朝時代の中国思想界でどのような地位を占めたのか。

『大般涅槃經集解』の涅槃師たちの仏性義に現れた中国的要素は、以後、地論思想、摂論思想などに直接的な影響を及ぼしたと言えます。後期涅槃師たちの三宝義は、地論師の拜自体仏思想に直接的な影響を及ぼし、境界因の概念は、摂論師の思想と密接な関係があるものと捉えられています。また涅槃師たちの思想は、三論、華嚴の仏性思想や禪宗、天台などの修行理論にも直接的な影響を及ぼしたと言えます。このように見る時、涅槃師たちの思想が持った中国的要素は、以後、中国仏教の特色を形成する際の先導的な役割を行なったといえます。

(翻訳担当：佐藤 厚)